

漢法苞徳塾資料	No. 552
区分	治療・配穴論
タイトル	治療と配穴の原理的なもの
著者	八木素萌
作成日	2003.03.31 日本伝統鍼灸学会雑誌 29 卷 3 号(50 号)

- (1) 「風」の病は春の気〈初之気〉に感作したもの
「熱」の病は夏の気〈二之気〉に感作したもの
「暑〔相火〕」の病は長夏〔前半〕の気〈三之気〉に感作したもの
「湿」の病は長夏〔後半〕の気〈四之気〉に感作したもの
「燥」の病は秋の気〈五之気〉に感作したもの
「寒」の病は冬の気〈終之気〉に感作したもの

- (2) 〈初之気〉を主るのは風木の足厥陰肝の気
〈二之気〉を主るのは熱火の手少陰心の気
〈三之気〉を主るのは暑相火の手厥陰心包の気
〈四之気〉を主るのは湿土の足太陰脾の気
〈五之気〉を主るのは燥金の手陽明大腸の気または手太陰肺の気
〈終之気〉を主るのは寒水の足太陽膀胱の気または足少陰腎の気
などというように認識されている。

注目すべきことは、『儒門事親』の巻 10 で、季節の気に対応する病についての、基礎的な治療原理と要穴を述べていることであろう。それによると、

- 「風木肝酸 達鍼 与胆為表裏…主治血…肝木主動
治法曰 達者吐也 其高者因而越之 可刺大敦 灸亦同」〈吐法〉
「暑火心苦 発汗 与小腸為表裏…主血運諸経…
治法曰 熱者汗之 令其疎散也 可刺少衝 灸之亦同」〈疎散〉
「湿土脾甘 奪鍼 与胃為表裏…主肌肉…
治法曰 奪者瀉也 分陰陽 利水道 可刺隱白 灸亦同」〈瀉法〉
「燥金肺辛 清鍼 与大腸為表裏…外応皮毛 鼻亦行気…
治法曰 清者清膈 利小便 解表 可刺少商 灸亦同」〈解表〉
「寒水腎鹹 折鍼 与膀胱為表裏…主骨髓…
治法曰 折之謂抑之 制其衝逆 可刺湧泉 灸亦同」〈抑制〉

と記述している。

- (3) これで、〈木・風・肝〉、〈火・熱・心〉、〈土・湿・脾〉、〈金・燥・肺〉、〈水・寒・腎〉の「五蔵の基本的治療穴」に対して、すべて陰経の「井穴」を用いることができると考えていたことが判る。

ここに記述されていない陰経の〈相火・暑・心包〉と、陽経の基本的な治療穴を、如何様に推定すべきかの問題が残されている。心包については、陰蔵と同列に論じられていきるのが一般的であるから「井穴」の中衝を「基本的治療穴」として良いものと判断できる。陽経については、「肝と胆」「心と小腸」「脾と胃」「肺と大腸」「腎と膀胱」など皆「表裏を為している」と述べられていることから、陰蔵との表裏関係により、陽経に対しても陰経の「井穴」を用いることができると考えていたことが判る。

- (4) こうして寒と熱の病とは「終之気」（寒・太陽寒水）と、「二之気」（熱・少陰君火）および「三之気」（暑・少陽相火）の病因に基づく病であり、また病態であることに他ならないというのが、基本的かつ基礎的な認識である。

- (5) したがって治療の際に用いる主要な経は、熱の場合には、手少陰心経・手太陽小腸経・手厥陰心包経・手少陽三焦経・足少陽胆経であり、また用いるのは各経の要穴の内でも「身熱を主る穴」つまり滎火穴や滎水穴となる。寒の場合には、寒水の経つまり足太陽膀胱経・足少陰腎経であり、また、各経の要穴の内でも「逆気して泄することを主る穴」つまり合水穴または合土穴と言うことになる。